

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古典に見えるアカネ
Author(s)	水谷, 智洋
Citation	プロピレア , 25 : 61 - 72
Issue Date	2019-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048244
Right	Copyright (c) 2019 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



古典に見えるアカネ

水谷 智洋

2015年7月のある日のことです。いつものように、家の前の玉川上水の遊歩道を柵内の草花に目をやりつつ散歩していると、かなりのご年配の男性が自転車をとめて、私に近づき、「このあたりでアカネを見かけたことはないか」と問いかけました。なんでも、万葉集の額田王ぬかたのおおきみの歌にも出る植物の由。しかし私は額田王のことも、アカネなる草についても何も知りませんでしたので、恐縮しながら、その旨を伝えました。

帰宅してすぐ、愛用の『山溪ポケット図鑑3 秋の花』(1994)を開きました。アカネはその57頁にありましたが、一見して、ヤブジラミをつる性にしただけのような地味い～な草です。あの老人はどうしてこれを、と訝しく思いました。

次に図書館で、山田卓三・中島信太郎『万葉植物事典——万葉植物を読む——』(北隆館、1995)、松田修著・岡田憲佳写真『万葉の植物』(保育社カラーブックス、1994)、それに、どうやら染色と関係がありそうなので、小川安朗『万葉集の服飾文化 上 万葉人の染色・色彩感覚』(六興出版、1986)の3冊を借り出しました。それらから判明したのは、アカネの名は「赤根」から来ていること、万葉集にアカネは11回見えるものの、額田王の歌「あかねさす紫野行きしめ標野行き野守は見ずや君が袖振る」(巻1・20)のように、「さす」を補って、「紫、日、昼」などの枕詞として用いられるのみで、草の形態や染色に触れるものはないという事実でした¹⁾。

それからの遊歩道歩きには、アカネ探しが目標のひとつにつけ加わりました。けれども、ポケット図鑑にいう「山野にごくふつうに見られるつる性の多年草」はなかなか見つかりません。玉川上水べりの2個所で自生しているアカネを発見したのは、4カ月も経ってからでした。上水脇の草地は都か市の指定業者が

年に2度、草刈り機（通称「バリカン」）で一網打尽に刈ってしまうので、草花は十分に成長できません。アカネの場合は、地中に残された根からわずかに茎を伸ばすことしかできないのが、見つけにくい原因のようです。そこで11月末の快晴の日に、思い立って武蔵国国分寺境内の万葉植物園まで足を伸ばし、はじめて本来の姿のアカネを実見することができたのでした。それ以降、調布市の自然観察園、府中市の浅間山（標高79.8m）公園などへも行きましたが、のびのびと育ったアカネが見られるのは、大方は植物が保護されている場所というのが実情のようです。

さて、このなんということもない植物がどう古代ギリシア・ローマに結びつくのかといえば、昨年、私がたまたま手にした森田慶一訳注『ウィトルーウィウス 建築書』（東海大学出版会、1977）に、「紫色をつくるのにアカネが用いられる」という趣旨の一文（後出(5)）を見かけたからに他なりません。これはひとつ調べてみようと思い立って、まずアカネのラテン名、それからギリシア名を探し、次に植物図鑑を見るまではよかったです。想定外の事実遭遇しました。なんと、日本とヨーロッパのアカネは同一の植物ではなかったのです。後者は「セイヨウアカネ」と命名されていて、形態も日本のそれとはかなり異なります。それに、残念なことに、セイヨウアカネに言及している古代の文献は、思いの外、少ないのです。そんな訳で、今回はごく手短な報告にとどまります。

順序として、2種の植物を堀田満他編集『世界有用植物事典』（平凡社、1989）によって紹介します。

Rubia L. アカネ属 英 Madder

双子葉植物、アカネ科。多年生の草本で、つる性になるものもある。温帯から熱帯にかけて広く分布し、約40種が知られている。そのうち数種の根が赤色の染料用に利用されていた。

R. cordifolia L.; *R. akane* Nakai; *R. argyi* (Lev.) Hara

アカネ（茜）英 (Indian) Madder 甲 茜草……山野にふつうにみられる多年草で、和名は赤い根の意味。茎は細く弱いが、長くのび、……逆刺により他の植物にからまり繁茂する。葉は心形で4枚が輪生状となるが、そのうち2枚は托葉である²⁾。夏から秋に多数の円錐状花序を出す。花は小さくて目立たず、……。果実は黒く熟し、液果で、……。根はひげ状に多数出て、色

素プルプリン purpurin などを含み橙色だが、空気に触れると暗紫色となる。……古代から染料植物としてよく知られ、この根の煎汁を使って茜染をする。……根を茜草根と呼び、中医方で止血、解熱強壯剤とし、鎮咳、去痰作用や、平滑筋の収縮を促す作用が知られている。茎葉も同様に薬用にされ、若芽は食用にされることがある。

R. tinctorum L. セイヨウアカネ (西洋茜) 英 Common Madder, European Madder ……原産地はヨーロッパから西アジアにかけての地域とされ、地中海沿岸で栽培されていた。つる性の茎は高さ 50~80cm、よく枝分かれし、短い刺がある。葉は広披針形で長さ 3~5cm、茎に対生するが、それぞれに 2枚の托葉がつくため 6枚の葉が輪生しているように見える。夏から秋に、茎端や葉脈に花穂をつけ、淡黄色の小花が多数咲く。花は先端が 5 裂し直径 5mm ほど、雄しべは 5 本である。根には配糖体の赤色色素アリザリン alizarin が存在する。深紅色で光沢があり、古来、重要な染料であった。絵具のローズマダー Rose Madder は、このアリザリンを用いたものである。化学染料の出現により、栽培は激減した。



Rubia a-*R. tinctorum* セイヨウアカネ, b-花.
c-*R. cordifolia* アカネ, d-果実をつけた枝

セイヨウアカネのラテン名は rubia、ギリシア名は ἐρευθέδανον です。それぞれ明らかに「赤い」を意味する動詞 rubeo, ἐρευθέω の派生語で、後者は動詞と τὸ δάνος 「贈り物」の合成語と解されましょう。ちなみに、英語 madder³⁾、イタリア語 robbia、スペイン語 rubia、フランス語 garance、ドイツ語 Krapp です。

いよいよ古代人の証言です。まずは植物学の祖テオプラストス（前 371 頃-287 頃）の記述から見てみましょう。

(1) Theophrastos, *peri Phytōn Historia* (lat. *Historia Plantarum*) 6.1.4.

ἐν δὲ τοῖς ἀνακάνθοις οὐκ ἔστιν οὕτως διαλαβεῖν τοῖς γένεσιν· ἢ γὰρ τῶν φύλλων ἀνωμαλία μεγέθει καὶ μικρότητι καὶ σχήμασιν ἄπειρος καὶ ἀσαφής· ἀλλὰ δεῖ πειρᾶσθαι κατ' ἄλλον τρόπον διαιρεῖν. πλείω δέ ἐστι τὰ γένη τὰ τούτων καὶ διαφορὰς ἔχοντα μέγας, οἷον

ところが、刺のない植物の場合は、上述の植物 [刺のある植物] のように、いくつかのグループ（ゲノス）に分類するのは不可能である。それらの葉には大小や形の点で、無数の不明瞭な違いがあるからである。そこで、別の仕方で分類を試みなければならない。これら [刺のない植物] に属す種類（ゲノス）は刺のあるものよりも種類が多く、[そのあいだに見られる] 違いも大きい。例えば……⁴⁾

「例えば」のあとに 17 種の植物名が列挙されますが、その 3 番目に出るのがセイヨウアカネです。（これから先、日本のアカネと紛れるおそれのない場合は、「セイヨウ」を省くことにします。なお、テオプラストスでは ἐρευθεδανόν とアクセントが ultima に置かれます。）『植物誌』では、アカネは τὰ φρυγανικά (1.5.3.) に分類され、そのうちの τὰ ἀνάκανθα に属するものとされています。前者は「小低木」、後者は「刺のない植物」と訳されるのですが、私のような素人には、「つる性の茎は 50~80cm」の草本が「小低木」というのには抵抗があります。ましてや、「刺のない植物」は明らかに誤りといわざるを得ません。しかしそうした不平不満は、たぶん、現代人の尺度で古代人を測る愚を犯しているのでしょう。

(2) Theophrastos, *peri Phytōn Historia* 9.13.6.

τὸ δὲ ἐρευθεδανὸν φύλλον ὅμοιον κιττῷ πλὴν στρογγυλότερον· φύεται δ' ἐπὶ γῆς ὡσπερ ἄγρωστις, φιλεῖ δὲ παλίσκια χωρία. οὐρητικὴ δὲ, δι' ὃ καὶ χρῶνται πρὸς τὰ τῆς ὀσφύος ἀλγήματα καὶ πρὸς τὰς ἰσχιάδας.

アカネの葉はキツタに似ているが、ただし、もっとまるみを帯びてい

る。ギョウギシバのように地面をはって伸び、日陰になった土地を好む。アカネには排尿を促す働きがある。このため、腰痛や股関節病にも用いられる。

ἄγρωστις を「ギョウギシバ」と訳してよいものならば、ギョウギシバ（行儀芝）は日当たりのよい土地に生えるイネ科の多年草の由です。アカネもまた日当たりのよい土地を好みそうに思われますが、さて、どんなものでしょうか。それはさておき、ここで不思議なのは、テオプラストスがアカネの薬効に言及しているのに、染料としての用途にまったく触れていないことです。ひょっとして、前3世紀頃までのギリシアでは、まだアカネ染めが広く行われていなかったのでしょうか。

アカネでものを赤く染める、ないし色をつける習俗は、ギリシア以外の土地でのそれですが、前5世紀の「歴史の父」が記録しています。

(3) Hērodotos, *Historiai* 4.189.2

αιγέας γὰρ περιβάλλονται ψυλὰς περὶ τὴν ἐσθῆτα θυσανωτὰς αἱ Λίβυσσαι
κεχρήμενας ἐρευθεδάνῳ,

リビュアーの女どもは衣装の上に毛をむしり房飾りをつけたヤギの皮をまとう、これはアカネを擦り込んで赤く色付けしたものである。

動詞 χρίω について *L-S-J* は、その本義を *touch the surface of a body, esp. of the human body* としたあと、*I rub, anoint with scented unguents, or oil, as was done after bathing* と、ホメーロスの有名な用例を挙げます。次いでいくつかの派生的な用例を引いたあと、ヘーロドトスの上記の箇所については、*II wash with colour, coat* の意であるとしています。これに従うなら、リビュアーの女どもは、ヤギの皮にアカネの赤い根を擦り込み、しみ出た汁で色付けしたということになります。

アカネ染めに言及したギリシア語文献がもうひとつあります。普通「70人訳」と呼ばれ、*LXX* とも略記される前3世紀のギリシア語訳旧約聖書です。

(4) *hē Metaphrasē tōn Hebdomēkonta, Eksodos* 26. 14

καὶ ποιήσεις κατακάλυμμα τῆ σκηνῆ δέρματα κριῶν ἠρυθροδανωμένα
汝^{そめ}赤く染たる牡山羊の皮もて幕屋^{おひ}の蓋をつくり

エホバがモーセに告げる指示の一端です。δέρματα κριῶν ἠρυθροδανωμένα は 25.5.にも出ますが ἐρυθροδανώ という denominative は LXX のみに見られる、ほとんど hapax のような動詞です。ちなみに *Vulgata* では *facies et operimentum aliud tecto de pellibus arietum rubricatis* となっていて、*rubia* は登場しません。

次はラテン語文献です。

(5) Vitruvius Pollio, *de Architectura Libri Decem* 7.14.2

fiunt etiam purpurei colores infecta creta rubiae radice et hysginum,
紫色はまた白亜をアカネの根やケルメスナラで染めることによっても
つくられる。

さまざまな建築物には壁画や彫刻がつきものです。Augustus 帝時代の建築家は、そこに用いられるべき絵の具についてまで懇切丁寧に指導してくれます。そこで紫色の場合ですが、ここまでお付き合いして下さった皆様なら、アカネの根が必須の顔料であることはすぐお察しいただけることでしょう。ですが、もうひとつの顔料 *hysginum* は見なれないことばです。これは *kermes oak*, *Quercus coccinea* というカイガラムシが寄生するナラの由です。試行錯誤の末にたどりついた方法だったのでしょね。

(6) Plinius, *Naturalis Historia* 19.47

Sunt etiamnum duo genera non nisi sordido nota volgo, cum quaestu multum polleant. in primis rubia tinguendis lanis et coriis necessaria: laudatissima Italica et maxime suburbana, et omnes paene provinciae scatent ea. sponte provenit seriturque similitudine erviliae, verum spinosis foliis et caule. geniculatus hic est quinis circa articulos in orbe foliis. semen ejus rubrum, postremo nigrum, radix rubra est. quos in medicina usus habeat dicemus suo loco.

さらに、巨利をもたらすところから、強欲な連中だけが知る 2 種（の植物）がる。ひとは羊毛や皮の染色に不可欠のアカネである。最も評価が高いのはイタリア産、とりわけローマ市近郊で採れるものである。また、ほとんどすべての属州でもふんだんに採取できる。アカネは自生するが、ヤハズノエンドウに似た種類は播種して栽培される。しかし、（ヤハズノエンドウと異なり）アカネの葉と茎には刺がある。また茎には節が多く、その節のまわりを円形に 5 枚の葉が取り巻く。種子は赤いが、最後には黒くなる。根も赤い。いかなる薬効があるかについては、しかるべき箇所述べるであろう。

森羅万象、なにひとつ書き漏らすまいとの執念が結実したかのような、御存じ、プリーニウス（23-79）『博物誌』の一節です。彼はここで初めてアカネを登場させるのですが、まず「巨利をもたらす」植物のひとつとして紹介するところなど、いかにも経済観念の発達したローマ人らしい目のつけどころと見られましょう。このことは、どうやらギリシア人が注目しなかったらしいアカネ染めを、一部の目はしの利くローマ人が恰好の儲け口と認識するに至ったという事態を想定させるように思われます。しかしながら、肝心のアカネの生態に筆が及ぶと、博物誌家は、種本を写し間違えたのか、エラーを犯しています。アカネの節のまわりに輪生する葉は 5 枚ではなく、6 枚なのです。なお、巨利を産むもうひとつの植物は *radicula* であると、19.48 で明かされています。これはどうやらナデシコ科のシャボンソウらしく、この草の根の汁で羊毛を洗うと驚くほど白く、柔らかくなるそうです。

『博物誌』にはあと 2 度、アカネが登場します。植物の薬効を記述する第 24 巻に 1 度、絵画・画家を論ずる第 35 巻にもう 1 度です。

(7) Plinius, *Naturalis Historia* 24.94

alia res erythrodanum, quam aliqui ereuthodanum vocant, nos rubiam, qua tinguntur lanae pellesque perficiuntur. in medicina urinam ciet, morbum regium sanat ex aqua mulsa, et lichenas ex aceto inlita, ischiadicos, paralyticos ita ut bibentes laventur cotidie. radix semenque trahunt menses, alvum sistunt et collectiones discutunt. contra serpentes rami cum foliis imponuntur. folia et

capillum inficiunt. inuenio apud quosdam morbum regium sanari hoc frutice etiam si alligatus spectetur tantum.

(ギリシアでは) エリュトロダヌム、またエレウトダヌム、ローマではルビアと呼び、羊毛の染色や皮のなめしに使われるのは別の植物である。薬剤としては、排尿を促し、蜂蜜水に入れて服用すれば黄疸を癒す。また酢と合わせて塗れば苔癬を治す。腰痛持ちや中風病みは、毎日、飲みながら入浴することが必要である。根と種子は通経剤となり、腫れものを散らす。蛇に咬まれたときは、葉をつけたままの茎を傷口にあてる。葉には髪を染める効能もある。私は何人かの専門家が、アカネは身につけて眺めているだけで黄疸を癒す、と書いているのを見かけた。

最初に「別の植物」とあるのは、アカネは前節 24.93 でその薬効を記述した *rhus erythros* 「赤ウルシ」とは別種という意味です。以下、先に 19.47 で「しかるべき箇所です述べるであろう」と予告されたアカネの薬効が列挙されますが、第2巻以降の記事の内容と典拠を列記した第1巻に‘*erythrodano XI*’とあります。プリーニウスはここでアカネの *medicinae* は 11 種と計算しているのでしょう。

(8) Plinius, *Naturalis Historia* 35.45

quare Puteolanum (sc. purpurissum) potius laudetur quam Tyrium aut Gaetulicum vel Laconicum, unde pretiosissimae purpurae, causa est quod hysgino maxime inficitur rubiaque quae cogitur sorbere.

プテオリー産 (の深紅染料) がきわめて高価な紫の染料を産するテュロスやガエトゥリーアやラコーニアのそれより称賛される理由は、それがケルメスナラやアカネ (から採れる染料) と容易に混ざるからである。後者は前者を吸収せずにはおかないのである。

最後に 1 世紀の薬物学の大成者ディオスクーリデースのアカネの項を見ましょう。

(9) Dioskuridēs, *peri Hylēs Iatrikēs* (lat. Dioscorides, *Materia Medica*) 3.143

ἐρυθρόδανον ἢ ἐρευθέδανον, ἔνιοι δὲ τεύθριον καλοῦσι. ῥίζα ἐστὶν ἐρυθρά,

βαφική· ἢ μὲν τις ἀγρία, ἢ δὲ σπαρτή, ὡς ἐν Ῥαβέννη τῆς Ἰταλίας μεταξὺ ἐλῶν ὠφελίμως σπείρεται διὰ τὸ γίνεσθαι ἐκ τούτου πλείστην πρόσοδον. εἰσὶ δὲ αὐτοῦ οἱ καυλοὶ τετράγωνοι, μακροί, τραχεῖς, ὅμοιοι τοῖς τῆς ἀπαρίνης κατὰ πάντα, μείζονες δὲ καὶ ῥωμαλεώτεροι, ἔχοντες ἐκ διαστημάτων τὰ φύλλα καθ' ἕκαστον γόνυ ὡσπερ ἀστέρας ἐν κύκλῳ περικείμενα, καρπὸν στρογγύλον, τὰ πρῶτα χλωρόν, εἶτα ἐρυθρόν, πεπαινόμενον δὲ μέλανα· ρίζα λιπτή, μακρά, ἐρυθρά, διουρητική. ὅθεν ἰκτερικοῖς μετὰ μελικράτου πινομένη βοηθεῖ ἰσχυαδικοῖς τε καὶ παραλελυμένοις· ἄγει δὲ καὶ οὔρα πολλὰ καὶ παχέα, ἔσθ' ὅτε δὲ καὶ αἷμα· λούειν μέντοι δεῖ καθ' ἡμέραν τοὺς πίνοντας· θηριοθήκτοις τε βοηθεῖ ὁ καυλὸς μετὰ τῶν φύλλων ποθεῖς· ὁ δὲ καρπὸς μετ' ὄξυμέλιτος πινόμενος σπλῆνα τήκει. προστεθεισα δὲ ἡ ρίζα ἄγει ἔμμηνα καὶ ἔμβρυα, θεραπεύει δὲ καὶ ἀλφουὸς λευκοῦς μετ' ὄξους καταχριομένη.⁵⁾

エリュトロダノンまたはエレウテダノン、テウトリオンとも呼ばれる。根は赤く、染色に適している。野生種もあり、栽培種もある。後者は、イタリアーのラベンナで行われているように、好んでオリーブのあいだに種を蒔く。こうすると最大の収益があがるからである。茎は四角で、長く、ざらざらしている。全体にヤエムグラに似ているが、もっと大きく丈夫である。一定の間隔をおいて節ごとに葉が星のように円形に取り巻く。種子は丸く、はじめは緑色だが、そのうちに赤くなり、熟すと黒くなる。根は細長く、赤い。利尿作用があるので、蜂蜜水と服用すると、黄疸、腰痛、中風を癒す。多量の濃い尿を出させるが、血を出させることもある。服用する際には、毎日、入浴せねばならない。蛇に咬まれたときには、葉をつけたままの茎を傷口にあてるとよい。種子を酢蜜にまぜて飲めば脾臓（の疾患）を和らげる。根を臙座薬として用いれば経血、胎芽を排出させる。酢と合わせて塗れば白癬を治す。

以上を振り返ってみますと、前 4-3 世紀の植物学の祖は、アカネの植物学的分類に苦心しますが、この草本の生態そのものについては簡単な記述しか残していません。それに引きかえ、1 世紀のディオスクーリデース、プリーニウスの記述は詳細です。薬効についても、テオプラストスは 3 疾患を挙げるのみでしたが、1 世紀の 2 人はたぶん 11 疾患を列挙しています。薬物学が進歩したのでしょうか。アカネのもうひとつの重要な用途である染色という段になると、前 3 世紀以前のギリシア語文献は非ギリシア人の利用法を 2 例挙げるのみでした。

この点、1 世紀の薬物学者はアカネは染色に適するとはっきり述べています。もともと、何の染色に適するかまでは言及していませんが……。もう 1 人の博物誌家は明快です。アカネは羊毛と皮の染色に用いる、うまくやれば巨利が得られる、どこに自生しているか、栽培法はしかじか……と、洩れなく説明しています。たぶん 1 世紀にはアカネの経済的価値が一般に認識されるようになり、その採取・栽培が、ギリシア人はさておき、少なくともローマ人のあいだで広まっていた状況を反映しているのでしょう。ところで、プリーニウスは、(6) で「羊毛と皮の染色」といい、(7) では「羊毛の染色と皮のなめし」といっています。あたかも、「染める」ting(u)o と「なめす」perificio が同じ作業を指すかのようです。しかし、perificio の本義は「仕上げる」ですから、「皮の仕上げ」が適訳なのかもしれません。おそらく、西洋古代の「なめし」は「染色」と大同小異だったのではないのでしょうか。アカネが重要な染料であったとすれば、「建築十書」が教示するように、紫色の絵の具の顔料として愛用されるのも当然のことでありましょう。しかし、ギリシア人は顔料としてのアカネに一度も言及していません。ギリシアの画家たちは、一体、どんな絵の具を使ったのでしょうか。

Excurses

I 安野光雅『絵のある人生——見る楽しみ、描く喜び——』（岩波新書、2003）166 頁に次の一節がありました。「<アリザリン・レーキ> 茜の根からとった、赤い色で、以前イギリスのウィンザー・アンド・ニュートンという絵の具会社が製造していましたが、今では原価の関係で作らなくなりました。わたしはよく使っていたので、さみしいです。昆虫記のアンリ・ファーブルは茜を栽培し、この色の染料をつくって、一山あてるはずでしたが、さあこれからというまさにそのとき、ドイツで合成して作ることが発明され、大打撃を受けました。」

ファーブルの話は初耳だったので、図書館で山田吉彦・林達夫訳『完訳 ファーブル昆虫記（十）』（岩波文庫、1993）を借り出し、「22 応用化学」という章を読んでみました。それによると、当時、フランスで大学教授に任命されるには個人的資産からの年収が必要だったので、ファーブルは広大な耕地（この耕地は、むろん、他人のものです——水谷注）に栽培されていたアカネから「染料原素のアリザリンを抽出しよう、……その純粋状態のものを得ようと考え

た。」(362 頁)そして「私は実際的で、金もかからない方法で、純粋な染色剤を抽出した。これは小さな量に濃縮され、染色にも、印刷にも素晴らしいものだ。私の友人の一人が、その工場で私の方法を、大仕掛に実施し始めた。ある更紗工場ではこの製品を採用して、すっかり喜んでくれた。」(363 頁)そして彼は 1868 年、レジョン・ドヌウル勲章を授けられます。しかし、ドイツの化学者が人工的に合成することに成功したため、ファールブルの事業は頓挫を与儀なくされ、大学教授の夢も断たれたのでした。「万事は休した。私の希望は完全に打ち砕かれた。さて今度は何をしたのか。梔子をかえて、そしてシシフオスの石をいま一度転がし直すことにしよう。あかねの大桶が私に拒むものを、インク壺から取り出すよう努めよう。*Laboremus!*「我ら働かんかな。」(375 頁)。ファールブルは第 22 章をこう結んでいます。アカネは『昆虫記』の作者に大きな希望と挫折を味わせていたのですね。

II 日本のアカネについても一言。「日本在来のアカネは外来のセイヨウアカネがもつアリザリンを含まず、色素成分はその誘導体のプルプリンであり、タンニンも多い。そのような悪い条件下で、茜雲の美しい色を染めるには高度な技術上の処理を必要とした。」(『世界有用植物事典』 吉岡幸雄『日本の色を染める』(岩波新書、2002) 28-29 頁によれば、その具体的な染色工程は次のようです。

「①まず、掘り起こしてきた茜の根を干して乾燥させる。②乾燥させた根を米酢に十時間浸ける。③根を取り出して真水に入れ、二、三十分煮沸して色素を抽出する。……④^{ひさかき} 柃 か椿の木を燃やして灰をつくっておき、そこへ熱湯を注いで上澄み液をとる。⑤灰の上澄み液を薄めてつくった液の浴槽で絹糸または絹布を約十五分間繰る。……⑥つぎに、③で抽出した茜の染液を別の浴槽に入れて摂氏五十度に保ちながら、そのなかで布(糸)を約十五分間繰る。この⑤と⑥の工程を繰り返すことによって染めの濃度はあがってきて、緋あるいは絳^{あか}と呼ばれるような赤や、あるいは黄味のある赤になるのである。」わが国の古代人も、きっと、これに近い工程を踏んだ茜染めを行っていたに違いありません。とても、お手軽な草木染めといった感じのものではありませんよね。

私は今、小金井市の西隣りの小平市に住んでいますが、家から 500m 程西の玉川上水に茜屋橋がかかっています。その名は、明治の初め頃、この辺り一帯で染料にする茜を手広く栽培していた家を「茜屋」と呼んでいたことに因む、と橋のたもとの碑に刻んであります。かつてこの辺にはアカネ畑が広がっていたのだな、と往時を偲びつつ、私は上水べりの散歩をつづけているのです。

注

- 1) 「茜染の記事は《古事記》上巻の大国主神の歌に<やまがたにまきしあとなつきそめきがしるにそめころもまつぶさにとりよろひ……>とあるのが初見。この<あとな (阿多泥)>がアカネと解釈され、出雲の大神がアカネを播種し、染木の汁の染衣を着ることを歌ったものとされる。」(『世界有用植物事典』(後出)より引用)
- 2) 4枚の葉のうちどの2枚が托葉かはまったく見分けがつきません。ただ、茎の先端に準備された4枚の葉を数時間観察すると、托葉となるべき2枚が識別できるように思われます。
- 3) 『研究社 英和大辞典』(第6版)は madder の語源を‘IE **modhro-* dye plant’としています。
- 4) 訳文は小川洋子氏のものです。『テオプラストス 植物誌 2』(西洋古典叢書、2015)、328頁より引用。
- 5) M. Wellmann (ed.) *Pedanii Dioscuridis Anazarbei de Materia Medica Libri Quinque* (3 vols., Berlin, 1906-14, rep. 1958), Vol. 2, pp. 152-3. なお、(9) は一見して (7) とよく似ていますが、プリーニウスは第24巻執筆時に依拠した *auctoribus externis* のなかに *Dioscurides* の名を記していません。